

対談

三重大大学社会連携
特任教授

川上 仁一

×

人文学部教授

山田 雄司

現代における 忍術学の意義とは

後編

三重大大学と上野商工会議所・伊賀市が連携し、2012年度より「忍術学」研究が始まっています。現代に忍術学を活かす試みと大学の役割について、三重大学人文学部の山田雄司教授と伊賀流忍術博物館名誉館長を務める川上仁一特任教授のお二人に語っていただきました。

三重大大学に求めるもの

山田 川上先生が大学に求めているものは、どういったことでしょうか。

川上 2つあります。1つはその歴史的な背景です。忍者、忍術というものを史学的に専門的に研究された方は見当たらない。調べた方はいるかもしれませんが、恐らく実像としてなかなか認めがたいということで研究が無駄になる。新しい史料も出てきにくいし、手つかずの部分があります。そうやって未だわかっていないものを「忍者、忍術が大切だ」というのもおかしい話です。忍術がどう

いうふうに発生して成立していったのか、史学的に可能な範囲で解明していただきたいということがあります。

もう1つは、先ほども言いましたけれども、実技というのは古典的な軍用の技術なのです。例えば、夜によく目が見えるようになる練習をしなくても、今なら赤外線線の暗視装置をつければもつとよく見えます。そういう技術を現在に普及させてもナンセンスでしょう。今は巷に情報が氾濫しすぎていますが、逆に昔は情報を得ること自体が大変

な時代で、そのため、忍術もシンプルでした。そういうシンプルなかでこそ、かえって真実を見る目が養えるのではないかと思います。基本的な情報の取り方や、人間が騙したり騙されたりということは、太古の時代からあまり変わっていません。そのテクニクを合理的に理解することは意義がないことではないのです。例えば、事業を行う方であれば、事業計画の中でそういった発想を入れることで従来と違う視点が生まれるでしょう。かつては敵国の情報を得て敵を攪乱し



たりしていたことを、現代の産業における情報戦や外交に取り入れることができているのではないかと思います。そういうものをまとめるには私の古典的解釈だけでは難しく、大学の力で活用できるようなまとめ方をしていただきたいと思っています。

山田 私は、三重大が伊賀市と上野商工会議所と連携して忍者研究をするという話を聞いた時に、「私にはできないんじゃないか」と二の足を踏んでいました。ですが、伊賀で「鈴鹿峠の鬼と山賊」に関する講演をしたときに、話を聞きに来られていた伊賀忍者研究会や伊賀の國地名研究会の方と話をし、彼らの「忍者に関して学術的な研究をやっていきいたい」という真摯な取り組みに心を動かされました。また、忍者研究のためにロシアから留学生が来るなどさまざまな偶然が重なり、「これはもう忍

者研究をやるしかない」と思いました。歴史学ではこれまで正面から取り扱われてこなかった分野だけれど、だからこそ研究する価値があるのではないかと思います。

川上 ぜひお願いしたいですね。今、「鈴鹿峠の山賊」とおっしゃいましたが、そこは人の往来が多くあった場所にもかかわらず、伊賀、伊勢、近江などが集まってきた一つの闇のような場所になっているのです。そういった一つの地域の風土や文化の中から出来上がってきたのではないかと思います。歴史的なものや行法的なもの（きょうほう）が体系化されて現代に活用できる形になれば、地域振興の大きな力になるのではないかと思います。今の時代、海外の人のほうが日本人より忍者をよく知っています。海外の人が、「ここへ来たら忍術を学ぶことができる」というところまでい

けたらいいですね。
山田 そうですね。

川上 そうすると、伊賀だけでなく甲賀も含めた三重県、滋賀県一帯の観光や文化的な資源に結びつくのではないかと思います。大学の力というのは非常に大きいですが、そういうことが実現できたらいいと思いますね。

山田 タイから私のところに来た留学生がいて、彼女たちも忍者のことはよく知っていて、ぜひ日本の伊賀に行ってみたいと言っていました。

川上 ははは。

山田 タイからの留学生もそうなのかと、少しびっくりしました。川上先生が三重大の特任教授になられたことも、日本に来る前から知っていたようです（笑）。

川上 忍者ですね、それは（笑）。

山田 今や情報は一気に世界に広まっていますか

ら、それをうまく活用することがまさに現代の忍者の情報作戦かもしれませんね。情報を集めるのではなく、今度は情報を拡散させると。

川上 情報を操作するというのは、忍術の基本の中にも入っていますしね（笑）。

山田 もう忍者という言葉自体は世界に広まっていますから、あとはここで内実を組み立てていき、忍者の拠点という形にして、さらに基礎的な研究を積み重ね、今度は忍術を広めるような道場を作って、そこで

忍者の心

川上 一度にそれらを完成させるといえるのは難しいですが、数年かけて体系化していくとして、そこには必ず、忍者の持つ反社会的要素というものをどうするかという問題が出てきます。そこはやはり心の問題になってくるわけ

訪れた人が鍛錬して、というようなことができれば、夢があつてとても楽しいと思います。



です。

山田 そうですね。

川上 侍の武術を学ぶときにも、そういう部分がありますね。忍者の心というのは、武士道と似ているけれど少し違ふところもあります。忍者の心は、江戸期に確立された



伊賀流忍者博物館 名誉館長

三重大学社会連携特任教授 川上 仁一

てしまいますね。

例えば、解錠の
ようなことを学
んでも、現代の
錠はそんなテク
ニックでは開か
ないようにでき
ています。しか
し、ピッキング
で開ける窃盗団
もいます。です

から、そういうテクニックが
存在するということだけ知っ
ておけば十分だと思えます。

山田 ええ。京都で座禅修
行をやりたいという外国の人
が多いのですが、武術を中心
とした忍術をしている外国人
もたくさんいるわけです。で
すから、武術のほかに精神的
実技的なものを忍術の道場で
学ぶことができれば、伊賀の
忍者が世界に広がっていくよ
うに思います。

川上 私もそれを強く望ん
でいます。そのためには、基
礎の部分が一番大事で、やは
り学術的に歴史的背景だけは
しっかりしておかなければい

けないですね。その時代の精
神を現代に生かしたり、次の
時代に伝えたり、自分自身の
生き方に活かすことができる
かもしれないので、そういう
方向に展開することも大事で
すし、この地域の文化にも反
映されていると思うので、地
域理解にもつながります。ま
さしく世界に向けて発信する
には一番いいテーマである
と思います。

忍術と修験道と自然回帰

山田 日本は世界一の長寿
国ですから、例えば、「日本
の長寿の核には忍術、忍者の
身体論がある」といったよう
に、忍者の修行や呼吸法、身
体の使い方などが世界に受け
入れられていくかもしれない
ですね。

川上 それはおもしろいで
すね。昔の日本人の一般的
な生活と言えるかもしれませ
んが、確かに忍者は、あまり肉
を取らずに雑穀を食べたり、



考え方ではあるのだけでも、
主君に仕え…というのは江戸
期の考えですから、中世に主
君という感覚が本当にあった
のかどうかかわらないです
ね。主君への忠誠心がそんな
にあったとは思えない。あんなに主君がくるくると変わる
のだから。

山田 そうですね。郡中惣ぐんちゆうそう
とか一国一揆といったものの
横のつながりのほうが大き
かったかもしれない。

川上 特に伊賀・甲賀は一
揆、郡中惣など、その地域の
連携の中から生まれてきて、
現代の考え方と案外近い部分
があるわけですよ。それら

が母体になって忍術がまと
まってきたのであれば、反社
会的要素であつても、それを
活用する人間の心が一番大事
なのです。どんな良い薬でも、
よけいに飲めば毒になるのと
同じです。

山田 いろいろな忍術書の中
にも、最初に「(忍術は)
盗みではない」というよう
なことが書いてありますね
(笑)。

川上 ええ(笑)。

山田 単なる盗賊とは違
うということが大事であつて、
そうでないと、窃盗団の養成
所になってしまう。

川上 そういうことになっ

えいがき
山花草によつて傷を治した
りと自然と共に生活してい
ました。それはどんな科
学が進歩している現代にお
いては逆に…。

山田 自然回帰のようなも
のですね。

川上 ええ、自然回帰とい
う方向に、忍術的生活はとて
もマッチしているところがあ
ります。

山田 私は修験道体験をし
たことがあるのですが、山



三重大学人文学部文化学科
日本地域研究 日本中世史・信仰史

教授 山田 雄司

川上 身体で動き、口で唱え、心の中に思う。修験道という身



山田 ええ。もともとの日

の中を歩いていると自然と一体になるような感覚がだんだんしてきて、風の音などに非常に敏感になることができたのです。忍者の修行でも、そういう感覚はあるのでしょうか。

川上 私は「神に近づく」ということを教えてもらったのですが、具体的なトレーニングとしては、白地に丸を書いて、それをじつと見ます。瞬きせずに見ていると、丸が大きく見えてくるのですよ。そして最後は、丸の中に自分が入っているかのような錯覚をする自分がいます。そうすると、外の音が聞こえるよう

に自分で感じるので。山田 なるほど。川上 比叡山では、仏像、仏の姿の軸（掛け軸）を前にして不眠不休で堂入りをやると、仏がこちらへ出てくるといって修行がありますね。自分の中へ仏が入ったりする錯覚がして、それが一つの境地であるわけです。そこには精神をコントロールするための、忍術と共通した方法があるのではないかと感じています。おそらく修験道から取り入れたと思うのですが、摩利支天や不動明王や飯綱やいろいろな呪文を唱えながら、

印を結びながらやるわけです。それは宗教ではあるけれどもキリスト教やイスラム教のような教えのある宗教ではないわけですね。山田 ええ。川上 神仏という自然の摂理を感じながら、そのものの中に入り込んでいくような自然観ですね。ですから、山田先生が修験道で体験された感覚は、まさしく同じような状況だと思います。山田 仏教でも、常行堂に阿弥陀如来があつて、頭の中で阿弥陀をイメージし、口で「南無阿弥陀仏」を唱えながら何日も寝ずに常行堂の中を回るといって修行があるのですが、やはり阿弥陀で全身を包まれるという感覚が出てくるようです。

川上 身体で動き、口で唱え、心の中に思う。修験道という身



本の宗教の特徴として、自然とどう対峙するのか、自然を自分の体の中に取り入れていくという特徴があると思います。ですから、現代の都会で疲れきった体をもう一度自然に戻したい、体験したいと思っている人は結構多いと思いますね。

川上 はい。

山田 そうした時に、忍術学というもの何らかのかたちで貢献していければ、非常に意味のあるものになりますね。

川上 「癒し」とよく言われますが、自然との一体感というのはやはり大事ですね。ヨガで一体感を生むとか、自然の中を散策しながら一体感を感じるとか、いろいろな方法があると思いますが、忍術で一体感を生むというのは、実践に近いような気がするのです。そういう方面からも忍術学をまとめ上げると、現代的活用の意味が増してくるのではないかと考えています。

今後の取り組み

山田 今年度は人文学部の教員が中心となつて、「忍者像の変遷」といった切り口で研究を行っていきます。来年度からは人文学部だけでなく、他学部も含めたかたちで講座ができたかと考えています。

川上 長いスパンで研究に取り組んでいただければ、その流れのなかで、別の人が別の切り口から

忍術を見ることができると思います。私の強みがあるとすれば、小さい時から江戸時代の忍術を学んだという、それだけです。いろいろな史料を読んで勉強している人のほうがよく知っているかもしれない。

山田 しかし、実体験として学ばれたことは、本で知った知識とはまったく違うと思



ますので、それは川上先生にしか語れないことだと思います。

川上 忍術のなかに学問の要素は結構あると思っていますので、ぜひお願いします。

山田 はい。今日はどうもありがとうございました。

川上 ありがとうございます。